【問題提起】― あがらないのはいいことだろうか ―

1 今回は少し、「あがる」ことについて考えてみよう。「あがる」というのは、ともかく通常の意識状態と異なる意識の状態である。だから、思いがけない失敗をしたり、平素の力が出なかったりする。そこで「あがる」のを防ごうということになるのだが、はたして、あがらないのはいいことだろうか。

問い

【考察】―「あがる」ことは大切なことだ ―

具体例

2 そもそも「舞台」に立って何かをするということ自体、「普通」でないことをしている。それを観る観客、聴く聴衆にしても、「普通」でないのではなかろうか。演劇であれば、舞台の上で人が死んだり、結婚したりするが、そんなのはすべて嘘といえば嘘である。それを知りながら、泣いたり笑ったりしている観客は、やはり普通の状態ではないところに引き込まれていくわけである。そんなとき、俳優がまったく冷静だったらどうなるだろう。観客はばかばかしくなるだろう。

3 音楽だってそうである。音を通して通常ならざる世界に触れるからこそ、感動が生じたり、心が癒されたりするのだ。スポーツでも、普段以上の力が発揮できてこそ、大勝負に勝てるのだ。

答え

4 とすると、「あがる」ことは必要、というより大切なことだ。「あがる」からこそ、名演奏ができたり、名演技ができたりする。そして、観客の感動もまた爆発的になる。

本質

【筆者の意見】―「あがりすぎないあがり方」ができるひとがほんとうのプロである ―

次の問題への布石

5 ところが、次の難しい問題は、あがりすぎると失敗するということである。初めに述べたように、われわれは「あがる」と、思いがけない失敗をしたりする。

問い

6 「あがりすぎないあがり方」、そんなことはあるのだろうか。それができる人が、ほんとうのプロだと私は思っている。あるいは、どんなに「あがる」ことがあっても、けっして失敗しない人、ともいえるだろう。たとえば、ハムレットは１００回もやったので次は全然あがらない、などというのは名優ではない。１０１回目もけっこう「あがる」人こそ名優だ。そして、どれほどあがってもけっして失敗がない、という点は十分な練習によって支えられているのだ。

答え

河合隼雄『ココロの止まり木』二〇〇四・五

要約例

はたして、あがらないのはいいことだろうか。「あがる」からこそ普段以上の力が発揮できるように、「あがる」のは大切だ。あがりすぎると失敗するが、「あがりすぎないあがり方」ができる人が、ほんとうのプロだ。（九九字）

※要約のポイント ―― 「具体（例）」と「抽象（本質）」を見分ける

書き手は自分の言いたいこと（本質）を述べるために、分かりやすく具体例を挙げます。このとき大切なのは「言いたいこと」の方なので、一般（抽象）化して述べている部分に注目します。